3/27

投資のあるある ③

目先の利益に飛びつく

価値認識、「今」が一番高い

今日が給料日前日として、どちらを選ぶか。

A「今日10万円もらう」

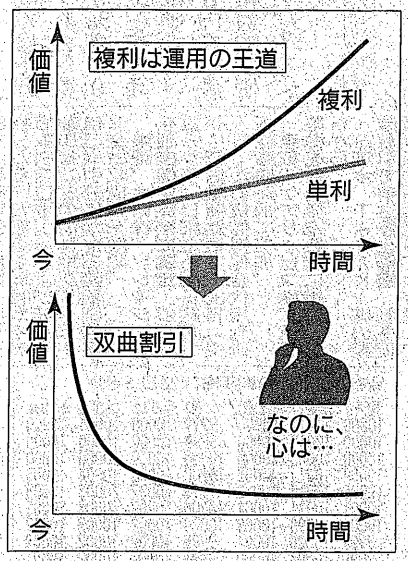
B「1年後11万円もらう」

「お得度」は計算すれば明白。Bの利回りは10%。メガバンクの普通預金金利が0・001%というマイナス金利時代にあって1万倍の好条件。なのに……。

ワナだらけの心は「今の利益」に飛びつく。「利食い急ぐな、損急げ」の相場格言は、自然体では逆に動く投資家の心をいさめる。損を恐れ、塩漬けるかと思えば、少し上がるとすぐ売却、その後の上昇に歯がみする――それが投資家だ。

一方、運用の要諦は複利効果。もうけが投資元本に加わり、新たな「元本」となり雪だるま式に膨らむ状況だ。前問Bのペースで複利運用すれば、10年後に約26万円と単利での増え方(20万円)を大きく上回る。

それを知りつつ「今欲しい」心理を行動経済学は「双曲割引」と呼ぶ。価値を縦軸、時間を横軸にとり価値認識の変化をグラフにすると、「今」が一番高く、離れるや一気に価値が減じ、後はなだらかに双曲線を描いて下落する。



人気の毎月分配型の投資信託はそんな投資家心をくすぐる。「毎月現金が入るのがいい」と東京都の山本陽子さん(78)。だが、その原資は運用益だけでなく元本の払い戻しも含む。

フィデリティ・USリート・ファンドB(為替ヘッジなし)の例でみてみよう。設定時の2003年末に100万円を投じ、仮に分配金をもらわず運用していれば時価は300万円弱に膨れる計算。だが、実際は累計約120万円の分配金を毎月もらったので今の元本は約45万円に減る。合計でも165万円だ。

無論、資金需要の都合で毎月収入を好む人もいるだろう。その時も**メンタルアカウンティング**には要注意だ。心は「色がない」はずのお金を色分けする。運用益は給料や年金など定収入より散財してしまいがちだ。